
ある青年のとある一日

龍隴月夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある青年のとある一日

【Nコード】

N0377P

【作者名】

龍隴月夢

【あらすじ】

初投稿。

ストーリーも文章も拙いですが、読んで頂けると嬉しいです。

日常にある小さな辛さも、重なれば不幸となる。

そんな辛さをいくつかを抱えた青年の、とある一日の話。

薄明かりの空が見える。

雨が冷たい。

とりあえず、生きてはいるようだ。

昨日の晩、凄まじい吐き気に襲われた俺は、道端に胃の中身をすべ
て吐き出し、そのまま倒れこんだ。

時計の針は七時を指している。

いつも通りの時間には起きることができたようだ。

この点は、とりあえず正常だ。

しかし体が小刻みに震える。

今日は病院に行つて、すぐ帰つて大人しくしているのが無難だろう。
幸い、今日は水曜日、一限だけの日だ。

一日休んだところで、どうということもない。

起き上がり、病院に向かって歩き始めた。

家に帰るには遠回りだが、歩いて十五分ほどのところに、幼いころ
からよく行っていた、医者が一人の小さな病院がある。

少し歩いて、ふと考えた。

なぜあんなに激しい吐き気が・・・？

答は分かっている。いろいろありすぎたのだ。

心が、身体が最近の身辺の変化についていけないのだ。

例を挙げるなら、大学入学と同時に、通学時間がかなり伸びたこと
だ。

長時間電車の中にいるだけで、人間不信の俺には、相当の疲労を与
える。

まあ、それだけではないのだが・・・。

とにかく、精神状態が、身体に異常を与えるほどに狂っている。
が、それもすぐに消えるだろう。

人間というものは便利なもので、いやな気持も、慣れてくればそのうち感じなくなっていく。

そんなことを考えながら目的の病院にたどり着いた。

その病院の唯一の医者は、病院の前でプラントーに水をやっていて、以前よりふけているが、相変わらず身のこなしはしっかりしていて、紳士的な彼の性格を表すようだ。

「どうしたんだい、ずぶぬれじゃないか。」

驚いたような声を聞いて、ようやく気がついた。

雨のなか、傘もささずに歩いていたので。

「風邪をひいちまうだろう。」

紳士的な性格とは異なった口調が、俺にかけられた。

「そう、ひいちまったんだ。診てもらえますか。」

「しかたねえな。どうせまた、金は無いんだろう？　たく。まあいいさ、出世払い待ってるぜ。中で待っててくれ。」

「シウウちゃん？」

待合室に入ると、見覚えのある、色白の整った顔が、俺を見ていた。

「・・・ユキか。懐かしいな、三年ぶりか？　中学以来、全く会っていない。」

「そうだよな、本当に久しぶりだよ！　元気にしてた！？」

懐かしい友達に会うと興奮する性格は、相変わらず、か。

「元気なら病院には来ない。風邪をひいちまったみたいだ、多分な。」

「あ、そうだね、大丈夫？」

「大丈夫かどうかを見てもらいに来た。それより、ユキはどうしたんだよ？」

「私もただの風邪。たいしたことないんだけどね、こじらせるのは嫌だか・・・あれ、どうしたの？　びしょびしょ。」

「今更か。」

苦笑した。

「はい、タオル。」

ユキのかばんから、ピンク色のタオルが出てきた。

「ああ、サンキュー。」

とりあえず、頭だけでも拭いておこう。

「ねえ、どうしてそんなに濡れているの？」

「この雨の中、寝てたんだ。」

「なにそれ、なにかの我慢大会？」

「いや、そんな酔狂じゃない。ちよつと気を・・・」

「そういえば、シユウちゃん、彼女できた？」

ユキは自分の質問の答えを遮った。

それはいいとしても、タイミングの悪さまで相変わらずだ。

「ああ、まあ・・・。」

「えー、どんな子？？ラブラブ？」

俺はつい、ユキを睨みつけた。

「え、ごめんなさい・・・私悪いこと聞いちゃった？」

ユキの悲しそうな眼を見て、強烈な罪悪感に襲われた。

「・・・いや、悪い。やつあたりだ。最低だな。ついこの間、フラれたんだ。何が何だか分かんないうちにさ。1年も付き合ってた彼女。情けないけどな、それ以来なんも手に付かなくて、どうやらストレスで胃を痛めたみたいでな、昨日、飯食って帰る途中、道端で倒れて、気を失ってた。」

「・・・そつか。」

少しうつむいたが、すぐに顔を上げ、言葉をつづけた。

「ごめんね、なんかちよつとホツとしちゃった。」

俺は言葉の意味がわからず、顔をしかめた。

「私ね、この歳になっても気持ちが変わっていなければ、言おうと思ってたことがあるの。」

一度言葉を切って、決心したようにもう一度口を開いた。

「私、シュウちゃんが好き。シュウちゃんが寂しいなら、私はずっと一緒に居てあげる。」

俺はその時、どんな顔をしたんだろう？

頭を拭いていたタオルを取り落してしまふほどの動揺だった。

落としたタオルが、俺の視界を遮り、次に視界が開けた時、病院の天井が目に入った。

「目が覚めたかい？ ったく、どうしたってんだ？ 胃がひどく荒れてるみたいだぞ。しばらく刺激物は避けるように。それから、風邪の症状がある。今日一日休んで、体調が良くならんようなら、明日も無理しちやいかんぞ。」

「・・・あれ？ ユキは・・・」

「ユキ？ 何を言ってるんだ？ あの子は・・・」

「いや、ごめん、夢見てたみたいです。」

「・・・そのようだな。 ったく、病院の前でいきなりぶっ倒れちまって、びっくりしたぞ。」

「ったく、って口癖、相変わらずですね。」

ありがとうございました、と、小声で言って、病院を後にした。

・・・あんな夢見たのも、高三の三月に掘り出したタイムカプセルのせいだろう。

中一の時に遊びで埋めたタイムカプセルだ。

中には、ユキと俺がそれぞれ、高校を卒業する頃の自分に対する手紙を入れていた。

ユキの、ユキ自身にあてた手紙の内容は記憶している。

『今の私はシュウちゃんが好き。 だけど、ずっと好きでいられる自信がないの。 この手紙を読んでいる私が、まだシュウちゃんのこと

を好きなら、シュウちゃんにこの気持ちを伝えてね。」

タイムカプセルを埋めた二年後、ユキは親の仕事の都合でアメリカに引っ越していった。

そしてその途中、ユキが乗った飛行機は墜落事故をおこし、乗客数は覚えていないが、生存者4名の大惨事になった。

独りで掘り出したタイムカプセルは、あいつが確かに俺の傍にいた証であって、俺があいつのことを大切に思っていた証でもあった。俺の書いた手紙にも、同じようなことが書かれていたのだから。

・・・しかし、今となってはどうにもならない話だ。

結局、また平凡な日々が始まるわけだ。

いっそ、あのままずっと夢の世界に・・・なんて事を思いながら歩き、家の前まで着いて、いつもと違う様子に気づいた。

しばらく空き家だった隣の家に、でかいトラックから荷物が運び込まれていた。

トラックの脇を抜けて家に入ろうとした時、聞き覚えのある、とても懐かしい感覚を覚える声に呼びとめられた。

「・・・シュウちゃん・・・？」

振り返ると、そこには望んでいた笑顔があって、夢に出てきたのと同じ、俺が知っている頃よりも少し成長したユキが居た。

「ユキ・・・なのか？」

あつけにとられる俺の顔を見てなんだか嬉しそうだ。

「私、戻ってきたよ！また日本で生活するために、戻ってきたよ！」

「お前、ユキ、だって、事故で・・・」

ユキの顔が曇った。

「うん、事故にはあったよ。」

「だって、生存者はたったの4人・・・」

「うん、私、その4人の1人。でも、お父さんとお母さんは・・・。」

「なんで今まで連絡くれなかったんだよ！」

「半年前まで記憶喪失だったの。」

「そりゃ、無理だな。」

「大変だったんだな……。」

でも、今日の前に居る。

確かに居る。

俺が一番望んでいたものが、今、手の届くところにある。

「ユキ」

「なあ……に？」

言い切る前に、俺は思い切りユキを抱きしめた。

「逢いたかった……逢いたかった……。」

強く、強く抱きしめた。

「私も……。記憶の片隅からずっと消えなかったシュウちゃんに

逢いたくて、こっちに來たんだよ。」

ユキもまた、強く、強く抱き返した。

「もう離さない。ずっと俺のものだ。俺の……。」

絶対に離さない。

せつかく手に入れた、何より誰より大事な人の傍に、ずっと居られ

るように。

「うん……。」

抱き返すユキの手に温もりを感じて、ああ、帰ってきたんだ、と強

く思った。

今日はユキにいろいろなことを話してやろうと思う。

離れていた日々の出来事一つ一つを埋めるように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0377p/>

ある青年のとある一日

2010年11月21日05時13分発行